

図説・日本の農業と食糧

山路 健 編著 小山智士 松浦龍雄

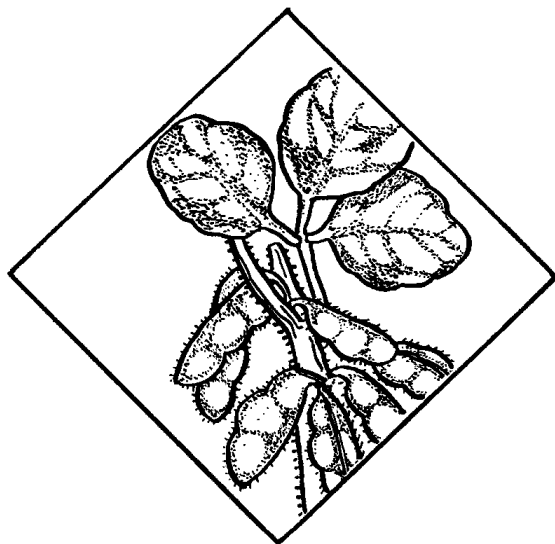


家の光協会

図説・日本の農業と食糧

山路 健 編著

小山智士 松浦龍雄



家の光協会

山路 健（やまじ・けん）

大正7年生まれ。農政調査委員会
企画調査部長。

小山智士（こやま・ともじ）

大正14年生まれ。農政調査委員会
国内調査部長。

松浦龍雄（まつうら・たつお）

昭和3年生まれ。農政調査委員会
専門委員。

図説・日本の農業と食糧

昭和55年5月3日 第1版発行

著 者 山 路 健

小 山 智 士

松 浦 龍 雄

発行者 来 馬 希 木

発行所 家 の 光 協 会

〒162 東京都新宿区市谷船河原町11

電話 東京260-3151(大代表)

振替 東京4724

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 寿製本株式会社

0061-51614-0301

© 1980 Ken Yamaji, Tomoji Koyama, Tatsuo Matsuura

落丁・乱丁本はおとりかいたします

序

家の光協会の要請を受けて、いままで1969年、72年、74年の3回にわたって農業・食糧問題の図説を刊行した。いずれも明暗さまざまな波紋を描いた変革期における農業・食糧の様変わりを浮彫りに図説化し、コメントした。今回の図説も、その手法においては既刊のものと大差ない。だが、75年央以降、農業・食糧の動向に重大な影響を及ぼす政治・経済・社会的な環境条件が複雑多岐にわたり、かつ不確定要因が多くなったことから、情勢分析が複雑になり、テーマの焦点をしぼることに戸惑った。加えて紙幅の制約もあって、今回の図説はマクロ的分析に志向し、ミクロの問題については割愛させていただいた。

農業・食糧の情勢分析が広範かつ複雑になった要因の第1にあげられるのは、他給系エネルギーの逼迫化と高騰から、石油と食糧が戦略物資として装いを新たにして登場し、食糧供給体系に大きな影響を及ぼしたことである。第2は、ひたすら走りつづけた経済成長のさまざまな矛盾が食糧供給体系でも顕在化し、食糧需給をめぐる基調が不確定に揺らいだことである。さしづめ80年代は、拡大された食糧需給の戦線を縮小し、重点的なものに焦点をしぼって、その対策を模索する地道な時代である。

そこで本書は、70年代の食糧需給の現象形態を図説化し、そのなかから反省材料を見出し、それを基調に、80年代のあるべき姿の模索を試みた。そのため、次のように章を6つに分けた。すなわち、第1章では、食糧の供給過剰と食糧自給率の低下の矛盾、石油漬けの食糧供給体系にみられる内憂外患、第2章では、剛構造から柔構造への脱皮を迫られる農政・農協の対応、第3章では、減速経済に見合う生産・流通の体質改善の必然性、第4章では、飽食文化に対する批判とその功罪、第5章では、「地方の時代」に応える農村地域社会のあり方、第6章では、混住化社会と都市化による農家の経営と暮らしの変容について分析をした。

80年代の農業・食糧問題はかつてない試練に直面し、現実はまだことに厳しく、悲観材料が多い。だが、黄金時代が現在であったためしはない。ゲーテの

ことばを借りていえば「人間は現在がすこぶる価値のあることを知らない。何となく未来のよりよい日を願い、徒らに過去と連れ立って嬌態を演じている」(『格言と反省』)。われわれは現在をもっとも大切にしなければならない。80年代の農業・食糧問題のあるべき姿を正確に把握し、そのなかから90年代への確たる布石を見出さなければならない。本書が、その手がかりの一助になれば幸いである。

終わりに、本書の原稿の提出が遅れたにもかかわらず、予定どおり本書が陽の目を見ることができたのは、乱筆乱文の原稿と図表を整理し、迅速にチェックしてくれた出版部の常見博兄の尽力の賜物である。衷心より深謝の意を表する次第である。

1980年弥生

山路 健

各章の執筆分担は主として次のとおりである。

- 第1章 食糧をめぐる内憂外患／山路健
- 第2章 農政・農協の戦略転換／松浦龍雄
- 第3章 生産・流通構造の体質改善／山路健・小山智士・松浦龍雄
- 第4章 飽食文化／山路健
- 第5章 農村地域社会の再構築／小山智士
- 第6章 農家の経営と生活の様変わり／小山智士

目 次

序	3
第1章 食糧需給をめぐる内憂外患	11
1. 不確定要因の多い国際食糧事情	12
70年代の先進地域は“供給過剰症” /12	
1人当たり食糧生産増にみる南北格差の拡大 /14	
食糧の安全保障を攪乱する所得水準の上昇 /15	
80年代の食糧需給は「高値不安定」か /19	
「総論賛成，各論反対」の食糧援助 /21	
2. 日本の供給過剰と食糧危機感の同居	22
食糧自給派と国際分業派の論争はナンセンス /22	
捉えにくい食生活の国際比較 /27	
世界一高い日本の食料品 /29	
ECよりも手厚い日本の農業保護 /31	
古米の山を崩すには英断的な措置を /33	
ミカンが生産過剰の戦国時代 /36	
牛乳よ，お前もか！ /38	
甘い飼料政策が招いた豚肉恐慌 /41	
避けられない畜産品の輸入 /43	
3. 石油に支配される食糧	45
経済合理性を越えたエネルギー多消費化と省力化 /45	
食糧自給率は煎じ詰めると石油自給率 /46	
食糧 1 Kcal を産出するのに 2.9 Kcal の石油 /47	
エネルギー効率の優等生は米，劣等生は魚 /48	
産業のなかでは省エネ型の食品工業 /52	
目立つ外食産業のエネルギー多消費 /53	

エネルギー・ロスの多い調理部門／55
 トータルでみなければならない省エネ戦略／55
 石油の高値はエネルギーの世代交替のはしり／57

第2章 農政・農協の戦略転換59

1. 融通のきかない農政の剛構造59

奥の院に鎮座する3つのタブー／59
 大狂いした食糧需給予測／60
 中央分権-地方集権の補助金制度／62
 バランスのとれない価格政策／64
 内外圧からはさみ打ちされる貿易政策／66
 地価無策こそ農政硬直化の元凶／68
 哲学を失った農本主義／70

2. 満身創痍の食管制度72

四苦八苦の過剰古米処理／72
 自主流通米は割安な“第2政府米”／74
 3つもある逆ザヤ米価／77
 政治米価がまかり通る米価算定／79
 米価体系は“一物多価”の乱れよう／80
 米の消費拡大運動は官製の誘導政策／82
 食管の外皮はカステラ，中身は羊羹／83

3. 迫られる水田利用再編の軌道修正84

米の生産調整はアメとムチの使い分け／84
 土地利用型農業の復権はほど遠い／87
 広域的な粗飼料流通の構想／88

4. 農地法への挑戦90

農地利用再編成は模索の段階／90
 補助金の切れ目が縁の切れ目の構造改善事業の再検討／92

ソフト部門への助成——地域農政特別対策事業／94

農用地利用増進事業に託する農地の流動化／95

5. 変身する農協……………98

旗印は「地域からの農業再編」／98

地域農業のオルガナイザーとしての役割／99

余裕金運用に泣く農林中金／102

減速経済に対応する信用事業の構造転換／104

第3章 生産・流通構造の体質改善 ……107

1. 水田利用再編に則った農業生産 ……108

痛し痒しの500⁺。水準の米反収／108

マイナー・クロップへの期待と不安／109

伸びた施設型野菜にピンチ／112

構造的過剰時代を迎えた畜産の悩み／114

計画生産の試練に直面した酪農／115

飼料生産構造の抜本的改正／116

デントライス構想はECの小麦版／117

系統農協の飼料米へのアタック／118

地域特産の再発見と新外来作物の栽培／119

自治体農業の新しい展開／121

2. 低エントロピー農業への回帰 ……122

古くて新しい問題——有機農業／122

各地に芽生えた省エネ技術／122

生産資材の需要も量から質へ／124

農業機械の過剰投資に反省ムード／125

脱多肥多薬農業には時がある／127

21世紀の農業を考える——グリーンエナジー計画／129

石油植物——バイオマス資源の開発／130

3. 顕在化した流通システムの矛盾131

中央卸売市場のメリットとデメリット／131

産直流通は地域生活圏でこそ必要／133

米流通業界の立ち遅れ／134

畜産インテグレーションの支配／136

宿題の多い食肉流通／138

流通革命に見合った牛乳消費拡大を／141

小売流通革命の功罪／143

第4章 飽食文化145

1. 飽食の現象形態145

核家族化と世代交替がもたらした食品需要の変化／145

理想的な日本人の栄養バランス／146

洋食は栄養過多，日本食は塩害／147

割高な食料費と食生活の贅沢志向／148

米離れ層は若い世代と非農家世帯／150

米の沈下現象の下限はどこか／154

粒食から粉食へのシフトも頭打ち／154

伝統野菜は斜陽化，洋菜は大モテ／156

飽和点に達した果実の需要／158

「飲む牛乳」から「食べる牛乳」へ／159

魚食の頭打ちは他律的要因から／161

潜在的需要の強い畜肉／162

2. 食事の社会化164

伸びるいっぽうの西欧型加工食品／164

食生活のなかに定着した外食／166

食品工業の多面的な経営戦略／167

成長産業の花形——外食産業／171

食事の資本主義的社会化は進む／173

経済的合理性を貫徹できない食品業界／173

怖ろしいのは無責任な情報公害／174

過剰包装をめぐる消費者の本音と建前／177

3. 飽食考178

学校給食がもたらした胃袋革命／178

食卓革命を遅れさせたのは米食パターン／179

普遍化した自由選択ニーズ／180

粗食＝贅沢食というパラドックス／183

近代食文化を管理する力のない伝統食文化／184

食糧形態革命は必然的な路線／186

第5章 農村地域社会の再構築189

1. 「地方の時代」来たる189

「地方の時代」と「地域主義」は両立するか／189

「地方の時代」と「地域主義」の虚と実／191

国づくりの哲学——田園都市国家構想／193

ヤマとマチを緑で結ぶ定住圏構想／195

定住圏構想を受けて立つ農林水産省／197

地域主義をジャストミートした地域農政／199

「ニュー農振」は新たな農業の領土宣言／200

脱過疎に行政の強力なテコ入れはあったが／202

2. ムラは変わる203

ムラづくりの短期的視点と長期的視点／203

平均的市町村長像は「やりくり主婦」／206

集落の管理機能は自治と活力にある／206

過小評価すべきでない混住化の利点／208

第6章 農家の経営と生活の様変わり211

1. 農地の利用と流動化211

依然として緩慢な耕地利用の回復／211	
農地の集団化に4つの類型／213	
強力な後楯なしでは農地は流動化しない／216	
東海・近畿・中国は中核的農家の孤立地域／217	
新タイプの賃貸借形態と小作料／218	
土地利用協定は地域農政の“ソフト版”／219	
2. 劣弱化する農業の働き手	221
年々2～3%減る農業就業人口／221	
農業の担い手は中・高齢層／222	
驚くべき農業労働の女性化／223	
「あとつぎ」の60%は非農業への就労／224	
3. 農家の経済と経営の動向	226
農家経済の先行きは不安／226	
兼業農家栄えて専業農家衰う／227	
多様な性格をもつ中核的農家の集団／229	
混住社会のパイプ役としての2兼農家／231	
借地型大農経営の形成へのアプローチ／232	
農業生産組織の主力はやはり水稻／233	
4. 都市型へ傾斜する農家の暮し	235
農家にも中流意識／235	
都市型を追う農家の衣食住／236	
農家の食生活に3つのタイプ／238	
農村の老人問題に2つの見解／240	
農業者年金制度はソフトな福祉政策／242	
農民の健康と医療の水準の遅れ／245	

図説・日本の農業と食糧

序

家の光協会の要請を受けて、いままで1969年、72年、74年の3回にわたって農業・食糧問題の図説を刊行した。いずれも明暗さまざまな波紋を描いた変革期における農業・食糧の様変わりを浮彫りに図説化し、コメントした。今回の図説も、その手法においては既刊のものと大差ない。だが、75年央以降、農業・食糧の動向に重大な影響を及ぼす政治・経済・社会的な環境条件が複雑多岐にわたり、かつ不確定要因が多くなったことから、情勢分析が複雑になり、テーマの焦点をしぼることに戸惑った。加えて紙幅の制約もあって、今回の図説はマクロ的分析に志向し、ミクロの問題については割愛させていただいた。

農業・食糧の情勢分析が広範かつ複雑になった要因の第1にあげられるのは、他給系エネルギーの逼迫化と高騰から、石油と食糧が戦略物資として装いを新たに登場し、食糧供給体系に大きな影響を及ぼしたことである。第2は、ひたすら走りつづけた経済成長のさまざまな矛盾が食糧供給体系でも顕在化し、食糧需給をめぐる基調が不確定に揺らいだことである。さしづめ80年代は、拡大された食糧需給の戦線を縮小し、重点的なものに焦点をしぼって、その対策を模索する地道な時代である。

そこで本書は、70年代の食糧需給の現象形態を図説化し、そのなかから反省材料を見出し、それを基調に、80年代のあるべき姿の模索を試みた。そのため、次のように章を6つに分けた。すなわち、第1章では、食糧の供給過剰と食糧自給率の低下の矛盾、石油漬けの食糧供給体系にみられる内憂外患、第2章では、剛構造から柔構造への脱皮を迫られる農政・農協の対応、第3章では、減速経済に見合う生産・流通の体質改善の必然性、第4章では、飽食文化に対する批判とその功罪、第5章では、「地方の時代」に応える農村地域社会のあり方、第6章では、混住化社会と都市化による農家の経営と暮らしの変容について分析をした。

80年代の農業・食糧問題はかつてない試練に直面し、現実はまだことに厳しく、悲観材料が多い。だが、黄金時代が現在であったためしはない。ゲーテの

ことばを借りていえば「人間は現在がすこぶる価値のあることを知らない。何となく未来のよりよい日を願い、徒らに過去と連れ立って嬌態を演じている」(『格言と反省』)。われわれは現在をもっとも大切にしなければならない。80年代の農業・食糧問題のあるべき姿を正確に把握し、そのなかから90年代への確たる布石を見出さなければならない。本書が、その手がかりの一助になれば幸いである。

終わりに、本書の原稿の提出が遅れたにもかかわらず、予定どおり本書が陽の目を見ることができたのは、乱筆乱文の原稿と図表を整理し、迅速にチェックしてくれた出版部の常見博兄の尽力の賜物である。衷心より深謝の意を表する次第である。

1980年弥生

山路 健

各章の執筆分担は主として次のとおりである。

- 第1章 食糧をめぐる内憂外患／山路健
- 第2章 農政・農協の戦略転換／松浦龍雄
- 第3章 生産・流通構造の体質改善／山路健・小山智士・松浦龍雄
- 第4章 飽食文化／山路健
- 第5章 農村地域社会の再構築／小山智士
- 第6章 農家の経営と生活の様変わり／小山智士

目 次

序	3
第1章 食糧需給をめぐる内憂外患	11
1. 不確定要因の多い国際食糧事情	12
70年代の先進地域は“供給過剰症” /12	
1人当たり食糧生産増にみる南北格差の拡大 /14	
食糧の安全保障を攪乱する所得水準の上昇 /15	
80年代の食糧需給は「高値不安定」か /19	
「総論賛成，各論反対」の食糧援助 /21	
2. 日本の供給過剰と食糧危機感の同居	22
食糧自給派と国際分業派の論争はナンセンス /22	
捉えにくい食生活の国際比較 /27	
世界一高い日本の食料品 /29	
ECよりも手厚い日本の農業保護 /31	
古米の山を崩すには英断的な措置を /33	
ミカン生産過剰の戦国時代 /36	
牛乳よ，お前もか！ /38	
甘い飼料政策が招いた豚肉恐慌 /41	
避けられない畜産品の輸入 /43	
3. 石油に支配される食糧	45
経済合理性を越えたエネルギー多消費化と省力化 /45	
食糧自給率は煎じ詰めると石油自給率 /46	
食糧 1 Kcal を産出するのに 2.9 Kcal の石油 /47	
エネルギー効率の優等生は米，劣等生は魚 /48	
産業のなかでは省エネ型の食品工業 /52	
目立つ外食産業のエネルギー多消費 /53	

エネルギー・ロスの多い調理部門／55
 トータルでみなければならない省エネ戦略／55
 石油の高値はエネルギーの世代交替のはしり／57

第2章 農政・農協の戦略転換59

1. 融通のきかない農政の剛構造59

奥の院に鎮座する3つのタブー／59
 大狂いした食糧需給予測／60
 中央分権-地方集権の補助金制度／62
 バランスのとれない価格政策／64
 内外庄からはさみ打ちされる貿易政策／66
 地価無策こそ農政硬直化の元凶／68
 哲学を失った農本主義／70

2. 満身創痍の食管制度72

四苦八苦の過剰古米処理／72
 自主流通米は割安な“第2政府米”／74
 3つもある逆ザヤ米価／77
 政治米価がまかり通る米価算定／79
 米価体系は“一物多価”の乱れよう／80
 米の消費拡大運動は官製の誘導政策／82
 食管の外皮はカステラ，中身は羊羹／83

3. 迫られる水田利用再編の軌道修正84

米の生産調整はアメとムチの使い分け／84
 土地利用型農業の復権はほど遠い／87
 広域的な粗飼料流通の構想／88

4. 農地法への挑戦90

農地利用再編成は模索の段階／90
 補助金の切れ目が縁の切れ目の構造改善事業の再検討／92